

狂言師茂山久蔵英政伝一斑

関 屋 俊 彦

はじめに

茂山久蔵英政は大蔵流茂山家第八代の狂言師である。文政四（一八二一）年死没。現在なお現役として御活躍中の茂山千作翁（昭和六十一年で八十九歳）を始めとする千五郎家は久蔵英政の高弟佐々木忠三郎が茂山家を再興したことに始まるものである。従って、千五郎家にとっては大事な節の人物の一人に数えられよう。例えば、綜合新訂版『能楽全書』第二卷（昭和五十六年、東京創元社）の掲げる「能楽諸家系譜」の釣図においても茂山千五郎家をこの人の代より書き起こしているほどである。

さて、この久蔵英政についての従来のまとまった成果としては笹野堅氏「狂言の発生と発展」（『能楽全書』五、昭和十九年）、茂山千作氏「狂言八十年」（昭和二十六年、都出版社）および、古川

久・小林資・荻原達子編「狂言辞典 事項編」（昭和五十一年、東京堂）の「茂山久蔵」の項を挙げ得る。又、彼は「花咲伝」「大蔵流大儀大事」及び「旧正録」（九世正虎の加筆部あり）と銘する伝書を残している。しかし、これらの伝書は「大蔵流大儀大事」が「茂山家秘書」として笹野堅氏等により一部紹介されただけであり、「花咲伝」「旧正録」についても、野上記念法政大学能楽研究所「蔵書目録 附 解題」（表章氏担当、昭和二十九年。以下「能研目録」と略称、法政大学能楽研究所は「法政能研」と略称する）に紹介される以上のことはなく、顧みられることの少ない伝書であった。以下、右の伝書ならびに彼の自筆台本（筆者架蔵）にも触れて、いささかなりとも茂山久蔵英政伝の展開を試みようとするものである。

尚、引用の際、旧字体は通行の字体に改め、任意に句読点を施し、改行明示の必要のある場合は／を以って示した。

一、伝書考

管見に及ぶところでは、茂山久蔵英政には広義において次のような三種の伝書がある。

大蔵流大儀大事

茂山千五郎家蔵。本書は笹野堅氏により「大蔵流秘書」として紹介（前掲）、「狂言の発生と発展」参照されたもの。「圖書総目録」も「大蔵流秘書」として項目を採ってある。131×210耗の横写本一冊。表紙に「第廿三号／八代目 茂山久蔵英政（花押）／秘書」と記す。又、裏表紙に「京都寺町通夷川上ル丁／当歳七拾歳／御用所御鏡司／本名 青造酒之輔／文化十一子正月吉日改」とある。茂山家で写された過去帳にも転載（後述）され、笹野堅氏が前掲論文で引用され、「狂言辞典 事項編」の該項目にも久蔵英政は「もと青造酒之輔（あきぞのすけ）といひ禁裏御用の鏡司であつた」と踏襲する。しかし、これには重大な疑いがある。同書は一見、一冊の本の表紙裏表紙に見えるが、実は明らかに後の覆い表紙なのである。言い換えるなら、この本は二重表紙となっているのである。一見、全一三五丁（そのうち、末尾一〇丁遊紙）に見えるが、元の本で言うなら一三三丁となる。第一丁と見えるのが実は表紙であり、それには「大蔵流大儀大

事／一子相伝／大極秘 他見無用／行歳六十四歳／茂山久蔵英政」とある。「大蔵流秘書」とせず、私に「大蔵流大儀大事」と標題をつけた理由もここにある。又、最終丁と思われたものが実は元の本の裏表紙であり、それには「于時文化七歳午ノ春／茂山久蔵」とある。本書が二重表紙であることにより生じてくる矛盾については「伝記考」の項で述べる。

本書の内容は次の通りである。丁数は元の本による丁数とし、「丁」は省き算用数字で示した。又、表はオ、裏はウと略記する。

- 1 (表紙ウ) 断書
- 2 (1~15) 初日から五日めまでの三番三・千歳心得。
- 3 (15~44) 間狂言心得
- 4 (45~62) 花子・釣狐の心得
- 5 (63ウ~70オ) 風流心得
- 6 (71~72) 遊紙
- 7 (73~80) 笛譜 「讃岐高松様御手役者／大阪住庄田与兵衛 笛之書／于時宝曆三歳之比」とある。
- 8 (81~82) 大秘として曲名列記
- 9 (83~87) 狂言小謡
- 10 (88~89) 大切ニ仕候狂言、曲名列記
- 11 (90~92) 狂言・間狂言注意書。

12 (93) 大藏弥右衛門石橋論争／安永五年三月廿二日

三番見搦ノ段立頭の事

13 (94) 間狂言等注釈

14 (98) 八島那須口伝書／大藏円真宗虎(花押)／宝永六丑歳八

月 佐久間二兵衛へ口伝写。

15 (99) 三番度式法

16 (100) 春日龍神注記

17 (106) 花子・釣狐心得之事

18 (113) 狂言心得

19 (114) 翁について

20 (119) 釣狐間

21 (120) 狂言之始り

22 (122) 道歌／弥太郎養子也。文化十一歳、歳廿三歳。

当時弥太良

23 (以下133まで) 遊紙

本書で明らかなのは大藏虎明の「わらんべ草」の影響が見られることである。12の石橋論争は「わらんべ草」八十九段の話であるし、22の道歌三首は「狂言ハたゝ大竹のことくに清てふしすくなかれ／狂言ハ軽き心そよかりけれ重きもわろししたるきもうし／あまりまたつよくといつもする業は物つよけれといやしそみる」

であつて、「わらんべ草」六十四段(『國語国文学研究史大成8 謡曲狂言』三省堂、昭和三十六年)をそのまま引用している。

花咲伝

A 国会図書館蔵『能狂言備忘録』第一冊所収

同書は上下二冊。帙入り。二三七・五×一六四・五糎。朱表紙。中央貼題箋「能狂言備忘録 上」と記す。第一冊序文に「能楽界の殊勲者池内信嘉翁、狂言の家元、其の他の秘書を借りて謄写し、備忘録と題して重製せられるものを借りて、そのまゝに影写せしめたるものこれなり／大正十五年五月／斑山文庫主人識」とあるように、池内信嘉氏が書写したものを高野辰之氏(斑山文庫主人)が再写したものである。第二冊が「旧正録」の写しであり、第一冊の二十七丁裏から五十三丁裏までが「花咲伝」の写しである。第一冊の目次は「一、宝生家略歴 二、若官祭礼薪能次第(金春家秘書) 三、興福寺南大門芝新能 四、梅若夷碑文 五、老翁秘記(茂山正虎) 六、翁神楽大事 七、花咲伝(茂山久藏英政) 八、壁書糎粕集 九、文禄二年禁裡御能番組 寛永正保御能組 一〇、上手名人之弁 喜多古能」となっている。

B 法政大学能楽研究所蔵
法政大学能楽研究所に「茂山久藏伝書」として所蔵されている。「能研目録」に次のように紹介する。

半紙判薄葉楮紙の袋綴。洗刷毛引き表紙に外題がある。軋入り。
「碓坂傳」「舊正録」「舊正録拾遺」の三冊。

奥書に「池内信嘉藏本により野村袋川氏の写しけるを借りて鶴銅泰徳をして謄写せしむ／于時大正十五年七月四日 葵園主人」とある。

野村袋川とは野村八良氏、葵園主人とは笹野堅氏のことである。

C 山口大学紫蘭文庫蔵

古浄瑠璃研究家若月保治氏(号、紫蘭)の筆写。内題「狂言研究の資料／旧正録／花咲伝／紫蘭文庫蔵」。四百字詰原稿用紙八十一枚(内、一枚遊紙)に「旧正録」と共に書写し、一冊に綴じ合わせるもの。茂山久藏奥書に続けて「右は二十七枚を抄出せるもの、他は芸道の心得多し。昭和十三年十月十六日、野村博士より借りて写し終。若月紫蘭」と記す。一日で急ぎ写したようで、序文等殆どが省略されており、実質的には十三枚(原稿用紙裏面使用)の黒インク筆写である。「旧正録」を先に書写していることからしても「花咲伝」にはあまり重きを置かなかつたようである。

「花咲伝」の内容は「能研目録」に見られる通りであるが、今少し気付いたところを補ってみる。

1 断書(序文) 今の狂言を讀んでいる訳だが、この箇所で見目されるのは「我まねふ大藏の流ハ虚成事はかろく実意をおもくすと言へる本文とかかねて聞およびぬれ共」と虚実論を説き、「昔より問

ハ当座の恥」と恥の論を展開するところである。大藏虎明が「わらんべ草」で「此道は虚実を専らとす」(四十九段)とか「問は一旦の恥」(八十二段)と説くのに似る。「大藏流大儀大事」で見たように、ここにも間接的にはあるが「わらんべ草」の影響を見ることも出来ると思える。

2 狂言役割割井ニ人体之式 「大王」以下「商人」まで九十種の役割分類を試みている。法政能研藏本では「座頭」の項が抜けている。紫蘭文庫藏本では書写者の若月保治氏が「珍敷曲」として何曲かに傍線を付している。ちなみに「花子」は「天上人」と「官女」の二箇所に分類されているが「釣狐」はいずれにも分類されていない。

3 作法 楽屋・舞台の作法。「真の座と云時ハ大藏流。鷺流とハ申せ共真ハ破也。子細有て流と申伝也。真に流と申は弥太良流にかきりたる事也。大藏ハ右衛門、流にては無之。八右衛門破也。和泉破也。尤しろうとに立也」の周知の箇所である。ここで気付かされるのは大藏流、中でも弥太郎虎明の流れのみを是としていところである。虎明と義理の弟清虎(八右衛門)の確執を既に承知しているような書きぶりである。又、「他流たり共、京都にては相互に装付合、鏡之間にても相互に世話可致事也」とあって、異流共演の難しさと実はそれが京都においてはよくあったことが知られる。

4 装束 時に応じての装束のつけ方についての注意。

5 勸進能・勸進狂言式 「御奉行機敷となりハ大坂新町茶屋上ヶ屋之亭主共機敷也。近頃おかしき也。此様子ハ不存候也。定めて様子ありけに候」「京都にて已前觀世大夫北野下ノ森にて興行有之と申。諸事扣書はノ鳥丸通雪駄屋町下ル丁 竹屋六左衛門ニ尋之よし」の覚え書きが注目される。

6 狂言同音之次第 地謡として座す際の時に応じての位置。

7 頂戴ものゝ式 太刀・扇・地服を頂戴する時の礼式。

8 間語と幕 間語の時の揚幕の状態。

9 忌詞 時に応じての詞章の吟味諸注意。

10 芸道身持つゝしゝ式 食事・用便に至るまでの細かな注意。

11 四拾八体之事出入立居 後に書き足すつもりであったか、項目が並ぶだけである。

12 跋文 自分の略歴。「伝記考」にて述べる。

旧正録

A 早稲田大学演劇博物館蔵「狂言雑録」一冊。紺表紙に外題「狂言雑録」は明らかに後の補修・書き加えであって、内容は「旧正録」そのもの。正虎自筆本である。一三八×二〇〇耗。八十四丁。但し前後に遊紙一丁ずつが入るので墨付は八十二丁。前遊紙に「若樹文庫」「昭和十五年十二月／安田一氏寄贈」の角朱印が押されている。

る。同館入手の経緯がわかる。奥書「此書者先代久藏英政少々書留

被置候跡、正虎ノ執行中、書見ノ中、心得ニモ可成歎ト思フ処、何ト無く書入、子孫ニ伝フ者也。九代目ノ茂山正虎（花押）ノ狂言元祖ノ玄恵法印也（中略）ノ文化三五歳初秋書之ノ行歳六十才ノ茂山久藏英政（花押）」

B 国会図書館蔵「能狂言備忘録」第二冊。前掲、花咲伝A参照。八十三丁。但し、前後並びに中間に遊紙各一丁。従って、墨付八十丁。

C 法政大学能楽研究所蔵 前掲、花咲伝B参照。別に「旧正録拾遺」一冊が伝わるが、「能研目録」に言うよう「後に笹野堅氏が、原本に據って省略した部分を補った」ものである。

D 山口大学紫蘭文庫蔵 前掲、花咲伝C参照。実質六十五枚の筆写。茂山正虎奥書に續けて「大正二年六月八日池内氏より借用して筆写畢。野村袋川ノ昭和十三年十月十五日、野村博士より借りて転写。若月紫蘭」と記す。本文は黒インク。朱に当たる部分は赤インクにて筆写。野村八良氏は注をする時「袋川曰」（法政能研蔵本）とするが、それは省略されている。又、法政能研蔵本に見られる「旧正録拾遺」も全て省略している。

「旧正録」は久藏英政のものに正虎が書き加えたものであるが、その内容は次の通りである。

- 1 元禄十四年京都大藏流指南家名寄 この中に本多中務殿役者の一員として「油小路四条下ル丁 茂山徳兵衛」の名が見える。
 - 2 狂言心得之言控 狂言語彙の注釈。採るべき意見も多い。
 - 3 有識故実・語意 ※23は法政能研蔵「旧正録拾遺」に入る。
 - 4 狂言同音心得之事
 - 5 狂言後見心得之事
 - 6 狂言分類 脇狂言、二番目、三番目、末の狂言。
 - 7 宝曆歳中之御京都大藏流指南家 久蔵英政と同時代の名簿なので引用する。「車屋町二条上ル丁 遠藤金蔵／きや町正面上ル丁 平井七蔵／五条小田原町 吉田為三郎／よしや町一条上ル丁 渡辺三郎介／かうやくのすじ 小出栄次郎／鳥丸松原下ル丁 和田正蔵／不明万寿南角 松本彦四郎／建仁寺町四条下ル丁 千田金介」とある。引用しなかったが、先の元禄十四年の名寄に見える者が二十名。こちらは八名。激減ぶりがよく窺われ、英政の嘆くのももっともと思われる。和田正蔵、松本彦四郎は「花咲伝」跋文にも見える名である。
 - 8 仕舞はたらき
 - 9 関東師家より申来り候控 各曲問語りにについての注意書。
 - 10 文政七^甲 正月江戸表々家元上京被致候。其節、忠三良（正虎幼名也。後千五良也）へ相伝被致候事控 末社三段之舞仕形付、三番三仕形付、千歳心得の事。
 - 11 有識故実、謡曲・狂言語釈、能役者伝記。「旧正録拾遺」では狂言語釈に関わるもの以外は一括して別記載とする。
 - 12 師家ニ御座候書上之写 享保六年、石川近江守殿へ差上ケ候控。
 - 13 源平つりの次第 「旧正録拾遺」にこれと狂言に直接関わらない雑説をまとめて記載する。
 - 14 注釈 「むかし名人の鷲仁右衛門に狂言を習しに、仁右衛門か曰、其元ハ自然と拍子利也。なれとも拍子と不拍子なるを能練たる拍子ならでハ実の拍子をしらす。其元にも心かけ厚からずんハ、拍子却不拍子とならんといひしと也」とか、改正木六駄とある注に「まつこせとハ子供等まつまでと云事にや冷泉為理卿被仰し」とあるのが注視される。前者で鷲仁右衛門とあるのは十六世鷲仁右衛門定賢（文政七年没、六十四歳）のことであろうが、「名人の」と冠するのも注意される。
 - 15 近來公儀江書写之写 本狂言・風流・問狂言についての書上。「八月 大蔵千太郎」とある。
- 以上であるが、「能研目録」で表章氏が「語釈は英政の著らしい」と推断される以上のものはない。後考に俟つ。
- 以上の写本の筆写事情関係は次の図のようになろう。

英政自筆「花咲伝」

(所在不明)

英政自筆原本「旧正録」→正虎補筆「旧正録」

(所在不明) (早大演劇博物館蔵)

↓「備忘録」

池内信嘉筆写本

↓野村八良筆写本

鶴銅泰徳筆写(笹野堅旧蔵本)

若月保治筆写本 (山口大学蔵)

高野辰之筆写本 (国会図書館蔵)

二、台本考

茂山久蔵英政は伝書のみならず、狂言台本を書き残していた。架蔵の一本がそれである。今、書誌を紹介すると、袋綴。一冊。一一八×一九一耗の横本。覆表紙に打ちつけ書きで右傍に「拾七冊之内十綱」、左傍に「真僧」とある。又、天地の縁に「真出家」と朱書する。裏表紙には「文化二丑歳春改/茂山久蔵/英政(花押)」と記してある。全八十六丁であるが曲の変わり毎に遊紙が挿入されてある。目次は曲名で本文内容と異なるものでなく、次の通りである。「地藏舞/薩摩守/不腹立/呂連/名取川/宗論/御茶水/骨皮/花折/若市」。本文朱入り(同筆と思われる)。

説明を加えるなら、文化二年に執筆された全十七冊の中の第十冊で、出家物狂言(但し、△若市▽が入っているのは不審)に分類される一群である。残り十六冊については所在不明である。

本文に朱の書き入れがあるが、見逃せない内容となっている。

それは「此狂言当流也。外に仕様有、心得べし。但し、セリフ同ぬなれと大違也」△地藏舞▽、「当流にてハ墨書之通也。京都にてハ朱書之セリフ入也。心得べし」△不腹立▽、「是ハ当流也。

又別に六儀有之」△呂連▽、「当流也。又外ニセリフ書付」△御茶の水▽、「当流也。又外ニ別六儀有。見合スヘシ」△骨皮▽となっていることである。

先ず「別に六儀有」とは別に狂言台本が伝わっていると言う意味であるが、ここで言う六儀とは何を指すのであろうか。茂山家に伝わっている台本であるとの可能性も残るが、いわゆる天理本が「狂言六義」、和泉家古本が「六議」と表題されるように、「六義」とは一般的に和泉流台本の通称と思える。今、どの本とは定められないが久蔵英政は和泉流の台本を見得たものであろう。

次に異流共演を意識した台本であると言うことである。殊に△不腹立▽では「當流にてハ墨書之通也。京都にてハ朱書之セリフ入也。心得べし」と次の二箇所台詞を挿入することとしてある。

a アドが「もし経は御存て御さらふの」と尋ね、それに対してシ

テが「もし経」と言うのは知らないとすつとぼけた時の応答。

アト夫ハ御坊之聞処か悪ふ御座る。何れも経ハ御存て御座るかとの尋にて御座る。

b シテが名前を問われて困った時の一人セリフ

シテ是ハ如何な事、愚僧ハようせうの時より持なか、只しんほちくくと斗呼れ、我名か何と申か存せぬ。何と致いたものて有ふぞ。イヤ思出した。申く。

アト何事て御座る。

すなわち、少々説明的な詞章に変更している。こうした台詞の変更は△不腹立▽のこの部分に限るものであり、他の曲には見出せない。しかし、後に付した「茂山久藏出演年譜」の789からでもわかるように、久藏英政は和泉流の三宅藤九郎等と共演している。「京都にては」とあるのは異流共演をする際の対応的な言い方であるとも言えよう。ただ、私には更にこれら「当流」京都にてはの表現に久藏英政の複雑な流派意識・家意識が読みとれると思う。これはいわば当流意識と言えるものであり、この当流意識が高いと言う点にかかわって和泉流を考へる時によく引用される「花咲伝」の「和泉破也 尤しろうとに立也」の記載のされ方であるが、笹野堅氏の前掲論文に引用された為もあって、取り立てて和泉流の素人的性格が言われてきたように思える。しかし、久藏英政の本来の姿は都人で

あることは彼自らが明言している。今は、彼が大藏流に立つがゆえに、それも都ではかろうじて立流しているがゆえの立場上の発言であった、と理解している。

三、伝記考

茂山久藏英政は文化三年に「花咲伝」なる伝書を著わしていることは先に述べた。その中で彼は自らのことを回想して述べている。由緒書に匹敵する基本資料と思えるので、これを次に引く。

我等九才之時より狂言道まなひし所、師たる遠藤金藏相果被申候。于時我十五才なり。門弟多ク有之候へども師たる者うせしにより、芸道是切と門弟治定仕たる所、紀州松井市太夫、関東倉谷武右衛門、上京二付、我等ハ上手森川栄介殿へ預ケ被申候。又、松本彦四郎は山川正九郎殿へ預ケ、和田正藏ハ上原友九郎殿格別心安中故、其方へ相談ニ被参候。千田金介、藤木他吉ハ森川氏へ相談と相成候。処に右上手栄介殿無程死去被致、夫寄名人松井市太夫殿ニ御世話ニ相成、其後様子有之候付、関東へ罷越、大上手倉谷武右衛門殿方に居候と相成、執行仕候事三年之あいた也。夫婦京仕候へ共、又、様子御座候て、芸道相休候事凡二十五年也。然る所、安田吉左衛門

相果被申候ニ付、もはや流儀相立候者京都に一人も無之。其時、我已前之事思出し、關東師家之御世話被下、倉谷氏長ニ御やしなひ被下、其上芸道極秘之事も被仰候ニ此儘にむなしく仕候ては神文の恐有、又ハ師家之手前カ相済不申、外ニ相統人無之、不殘古人と相成、殘し者ハ我壱人、相手なけれハ如何せんと思ふ折から、岡村千歳殿御すゝめにより、釜座下立売上ル丁にて小借家かり、誠に少心と申も恐也。つたなき芸ながら稽古場相立候處に、せけんハひろきものにて、出世かちとやら申習にて、段々門弟あつまり、我等なからふしきをなし候が(以下、略)于時文化三歳卯春ノ当歳六十一才也ノ茂山久蔵ノ英政(花押)

次に茂山千五郎家で拝見させて頂いた過去帳(以下「茂山家過去帳」と称する)を紹介する。記載順序は私意に改めてある。

融齋釈道園 自元祖八代目茂山久蔵英政。文政四年巳年六月廿六日。行年八十二歳。於中山火葬。西大谷納骨。三州岡崎城主本多中務大輔、大輔浪人源兵衛相統。禁裏御鏡司。本姓青造酒介ナリ。

まず、久蔵英政の出生について考えてみる。得られた資料は次の通りである。

A 元文五(一七四〇)年出生。『茂山家過去帳』の文政四年、行

年八十二歳による。

B 延享二(一七四五)年出生。『大蔵流大儀大事』の後補裏表紙に青造酒之輔名で文化十一年に七十歳とあるのによる。

C 延享三(一七四六)年出生。『花咲伝』跋文に文化三年秋、六十一歳とあるのによる。

D 延享四(一七四七)年出生。『旧正録』に文化三年春、六十歳とあり、『大蔵流大儀大事』の本来の表紙・裏表紙に当たるものに文化七年、六十四歳とあるのによる。

このうちAは他と比べると、いかにも年齢差がある。後に述べるが細かいところで矛盾する点もある。『狂言辞典 事項編』(前掲)ではCを了解した上でAをとっているが、私は素直に諸写本の記述を信用する方が良いと思う。

次にBであるが、伝書考で先述したように「茂山家秘書」として知られていた本は実は『大蔵流大儀大事』なる本に後から表紙・裏表紙を補ったものであった。特に裏表紙はどうも別筆の可能性が高いこともあって、別人の筆写であることも予想される。すなわち、私は文化十一年七十歳の青造酒は久蔵英政とは別人ではないかと考えるものである。文化十一年に英政から何らかの理由で譲られた本の単なる所有者の名前ではなかったかと思っている。従って、英政が鏡司であったとされるのも何等関係ないものと思われる。又、

「茂山家過去帳」の記述は「大藏流大儀大事」の二重表紙の記述を参照した記述が多過ぎるように思われる。元、岡崎藩士であったと言うのも傍証不可能である。恐らく茂山家で後に書き足された部分が多いであろう。本来の過去帳は未見である。一体、背酒造輔は何者であるかとの問題は残るが、いずれにしても久藏英政は、やはり狂言の芸で以って召し抱えられていたと思うのである。

CDはいかにも近く、どちらとも判断しかねるが、異なる二種の写本が年齢は一致するので、今のところDを採用したい。すなわち文政四年没、享年七十五歳とする。

次に宮内庁書陵部所蔵「禁裏仙洞御能記」（以下、「禁裏記録」と略称）は詳細な館組を記載（全七冊、但し第六冊欠本）してあり、茂山家の動向も読みとることが出来る。今、「花咲伝」の文脈と併せて読み進めてみる。尚、これらの館組は年譜として本稿の後に付した。現在の茂山家では、九代正虎の時分に井伊家より千五郎名を頂戴したとの言い伝えがあるが、それ以前にすでに千五郎名を名乗っていて、しかも若い間の名乗りであった、と思われる。

「花咲伝」に「我等九才の時より狂言道まなびし所」とある。九歳だと宝暦五年のことである。「禁裏記録」によると、宝暦五年三月十六日（年譜7参照）の八幡Vで初めて「千五郎」の名前が出てくる。「まなびし」とは初舞台そのものを指しているのではあるま

いか。ちなみに千五郎は三宅三平や同惣三郎・藤九郎等と共演している。三宅は和泉流三宅派である。異流共演が当り前の時代・場所柄であり、和泉流の影響も多く受けていたであろうと考えられる。又、元文二年の年譜2を始めとして、年譜3から年譜6まで茂山久藏の名が見えるが、これは先代七世の久藏のことであろうし、正徳三年（年譜1参照）の茂山源右衛門は先々代六世のことであろう。英政以前の茂山家にとっては新資料となるが、今ここでは詳しく触れない。

次に、「花咲伝」には「師たる遠藤金藏相果被申候。于時我十五才なり」とあり、英政は遠藤金藏から狂言の手ほどきを受けていたことがわかる。この遠藤金藏のことは「旧正録」に「宝曆歳中之御京都大藏流指南家」として見られる（前掲、「旧正録」内容7参照）。そして、宝暦版「改正能訓蒙図彙」（宝暦十二年刊、「能楽資料集成」に影印）に名前が記載されている（英政は「烏丸丸太町下ル茂山久藏」とあり、その頃の住所もわかる）ことや、「禁裏記録」に再三書き止められていること（年譜3 10 11 13）から傍証可能な人物である。たゞ「我十五才」の時に亡くなったと言うのには不審が残る。英政が十五歳の時は宝暦十一年である。ところが「禁裏記録」の明和四年五月十六日（英政二十一歳）の八花折V立衆名に遠藤金藏の名が読みとれる。尤も子息襲名の可能性もあるので一概に

否定は出来ない。後考に俟ちたい。

次に、遠藤金蔵が亡くなって後、英政は森川栄介（先の『改正能劇家図彙』に「高倉四条下ル 森川栄介」とある）の預るところとなる。森川栄介死去後は紀州藩お抱えの松井市太夫（松井市太夫については「隣忠見聞集」へ能楽資料第二編に翻刻がある）にその逸話があり、笹野堅氏も「狂言の発生と発展」へ既出で紹介している）に世話になり、後、江戸に行き、倉谷武右衛門方に居候となったと言う。転々とさせられた不幸な青年時代ではあったが、「芸道相林候事、凡二十五六年」と言うのはいささかの潤色であって、『禁裏記録』に安永元年・二年・三年（年譜14、16参照）、天明三年（年譜18・19）にその名が見える。出演記録回数がこれでは少ないとも言えるが、江戸の倉谷家に居候と言うことなので、もっと演能記録を探索すれば江戸を中心とした彼の活躍が浮き上がってくるであろう。但し、久蔵英政の時代と重なるもので、例えば江戸城内での記録である「ふれながしお能組」（鴻山文庫・法政能研蔵）には該当する名前は見出せない。変名を使ったかも知れないが、後考に俟ちたい。

更に、京都大蔵流の中心人物であった安田吉左衛門が亡くなった後、京都大蔵流は危機に陥ったようである。結果的にはその後を埋めるような形で岡村千蔵の努力もあって、京都へ帰り「釜座下立売

上ル丁」に居を構え、遂には稽古場を持ち繁栄を迎えることとなったようである。

晩年はしかし後嗣もなく、一旦、茂山家は絶えることとなり、正虎が再興することとなる訳である。西大谷に葬られたと言うが、その墓所の所在は未詳である。

本稿を為すにあたり、茂山千五郎氏・法政大学能楽研究所・早稲田大学演劇博物館・山口大学紫蘭文庫の皆様方にお世話になり、田口和夫氏に台本の解釈、橋本朝生氏に茂山家との仲介の労、蔵書の内容の御教示を得ました。記して御礼申し上げます。

付・茂山久蔵出演年譜

※「禁裏仙洞御能記」から略記した。

※曲名の記載は通行の字体に改めた。

※ゴチックで通し番号をつけた下の数字は月日を表わす。

正徳3

1 1・21 へ狂言舞へオモ茂山源右衛門

元文2

2 3・27 △花折▽オモ茂山久藏

延享 4

3 10・26 △千切木▽オモ茂山久藏 他ニ遠藤金藏等

4 10・27 △鍋八鉢▽オモ久藏

寛延 1

5 2・27 △棒縛▽オモ茂山久藏 △河原太郎▽オモ久藏

宝曆 2

6 5・18 △磁石▽オモ茂山久藏

宝曆 5

7 3・16 △鍾▽相四郎代り千五郎 オモ三宅三平

宝曆 6

8 10・5 △麻生▽孫三郎千五郎 オモ惣三郎

9 10・26 △博奕鬼▽鬼千五郎 オモ藤九郎

宝曆 8

10 10・15 △今参▽茂山久藏 △鏡▽久藏 △花盗人▽茂山久藏

他ニ遠藤金藏 △鰻頭▽久藏

宝曆 10

11 3・13 △拔殻▽茂山久藏 金藏 △長光▽久藏

宝曆 11

12 3・27 △酢盎▽茂山久藏

明和 4

13 5・16 △花折▽立衆遠藤金藏

安永 1

14 5・9 △靱猿▽猿引茂山久藏 △狐塚▽オモ久藏

15 9・25 △車僧間▽茂山久藏 オモ門治

安永 2

16 3・7 △禰宜山伏▽茂山久藏 △車僧間▽久藏 オモ網治

安永 3

17 5・27 △千歳▽茂山久藏 △花子▽太郎冠者久藏 △花折▽立衆

久藏

天明 3

18 3・6 △随方角▽伯父茂山久藏

19 5・3 △財宝▽茂山久藏